

(様式 1)

令和 7 年度 学力向上を図るための全体計画

学校名	墨田区立墨田中学校
校長名	小出 和正

1 本校の学力に関する状況

(1) 墨田区学習状況調査結果から

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">・国語・数学・英語の 3 教科においては、全学年で全国平均正答率を上回っており、安定した学力の定着が見られる。・とりわけ国語では、全学年で校内平均が目標値および全国平均を上回り、B層の割合がいずれの学年も 50%を超えていることから、多くの生徒に読み取りや表現の基礎力が着実に備わっていると考えられる。・数学も全学年で全国平均を上回っており、3年では全国との差+4.7ポイントと最も大きい。A層 13.1%、B層 36.5%と、昨年度(2年時)と比較して中上位層の育成が進んでいる。・英語も全学年で全国平均を上回っており、特に1年(+3.4ポイント)・3年(+7.9ポイント)において顕著である。B層とA層の合計が1年では65%近くにのぼり、表現力を含めた4技能の基盤が整いつつあることがうかがえる。・これらの教科では、基礎の定着と上位層の伸長が両立しており、学力の多層的な充実が本校の強みである。	<ul style="list-style-type: none">・理科・社会では、全学年を通じてD層・E層の割合が高く、基礎的な理解の定着に課題が見られる。特に2年生では、理科が目標値比-6.8ポイント・全国との差-2.6ポイント、D+E層合計が56.1%と過半数を超えており、学年全体で学び直しの必要性が高い。社会も同様に、目標値を下回り(-2.6ポイント)、D+E層が53.0%と高く、語句理解や資料の読み取り、事象と関連付けた理解に課題がある。・また、数学や英語においても、上位層の育成が進んでいる一方で、2年生を中心にD・E層が3~5割程度存在しており、学力の二極化が生じている。・今後は、つまずきの早期発見と段階的な支援の強化を図り、基礎からの理解を底上げする指導の充実が急務である。

(2) 意識調査結果から

成 果	課 題
<p>○学習意欲・学習習慣・生活習慣に着目して</p> <ul style="list-style-type: none">・1年生 <p>学習意欲の標準スコアは54.2で、全国平均を4ポイント以上上回った。先生や友人との関係、成功体験の積み重ねが意欲の向上につながっているとみられる。学級の規範意識も高く、複数のクラスで60を超える結果となった。</p>	<p>○学習意欲・学習習慣・生活習慣に着目して</p> <ul style="list-style-type: none">・1年生 <p>学習習慣の標準スコアは49.6で、全国平均をやや下回った。意欲はあるが、行動に結びついていない生徒が一定数いる。生活習慣は52.9と良好に見えるが、リスクマネジメント票によれば、4割弱の生徒に課題があり、特にメディア利用の多さが目立つ。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・ 2年生 学習習慣の標準スコアは 51.4 で、全国平均をやや上回った。どのクラスも計画的な学習行動の定着が見られる。学級の規範意識も 52.5 と安定しており、落ち着いた集団づくりが維持されている。 ・ 3年生 学習意欲の標準スコアは 53.9 で、全国平均を大きく上回った。進路を意識した取り組みが意欲の向上につながっており、学年全体として高い水準を維持している。生活習慣も 53.3 と良好で、複数のクラスで全国平均を大きく上回る傾向が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2年生 学習意欲の標準スコアは 51.8 で、全国平均を上回ったものの、1年生と比べてやや低く、意欲の維持に差がある。生活習慣は 52.0 と数値上は良好だが、4割弱にリスクが見られる。睡眠不足が最多で、次いでメディア利用が多い。 ・ 3年生 学習習慣の標準スコアは 51.4 で、全国平均を上回った。しかし、学年内でのばらつきが大きく、継続的な学習行動が十分に定着していない層も見られる。生活習慣は数値上良好だが、実際には全体の 6割近くに生活面でのリスクが確認された。特に睡眠不足が最も多い。
--	---

(3) 墨田区学習状況調査や意識調査以外から明らかになっている学習に関する状況

全国学力・学習状況調査から

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ・ 国語では、正答数 10 問以上の生徒の割合が 33.3%と全国平均 (25.8%) を上回っており、文章の読み取りや要点の把握など、基礎的な読解力が定着している。 ・ 数学では、14～15 問に正答した生徒の割合が 14.6%で、全国 (8.8%) より多く、論理的に考える力を活かして応用的な問題に取り組む姿が見られる。 ・ 理科では、IRT (項目応答理論) に基づくスコア分布で、標準的な層とされる「バンド3」(スコア 450～549) の割合が 48.9%と全国 (42.0%) を上回り、基礎・標準レベルの理解が安定している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国語では、記述式問題の無答率が高い (14.6～39.6%)。与えられた情報を取捨選択し、自分の考えを論理的に言語化する場面で困難を感じる生徒が一定数存在すると考えられる。 ・ 数学では、正答数 0～2 問の生徒が 16.6%と全国 (15.8%) よりやや多い。基礎的な知識・技能に課題を抱える層が存在する。 ・ 理科では、やや上位層に該当する「IRT バンド 4」(スコア 550～649) の割合が 17.7%と全国 (20.3%) を下回っている。観察結果をもとに推論したり説明したりする場面で得点が伸び悩む傾向がある。

2 本年度の学力向上に関する主な取組

(1) 「学習ふりかえり期間」と連動した基礎学力の定着強化

区内で設定された「学習ふりかえり期間」を活用し、理科・社会を中心に基礎事項の定着を図る。教科別の「ふりかえりシート」を単元内で複数回活用し、理解の定着と自己調整力の育成を目指す。調査結果を踏まえた指導により、D・E層の学び直しと学習習慣の改善を同時に進める。

(2) 「墨中スタンダード」に基づく授業改善と協働的な学びの充実

校内研究を通じて、「分かりやすい授業」「柔軟性のある授業」「協働的な学び」を柱とする本校独自の授業改善モデル「墨中スタンダード」を深化させる。授業目標の明示、見通しの共有、話し合い活動の型化、一人1台端末の活用など、具体的な指導技術を校内で共有し、授業改善を日常的に推進できる体制を整える。

(3) デジタルツールを活用した個別最適な学習支援の充実

ロイノート、ミライシード、Qubena、デジタル教科書などのツールを活用し、生徒の習熟状況に応じた課題提示や振り返りを通じて、学習の個性化を図る。特に数学と英語においては、指導の個別化を推進し、ICTを活用した補充学習や家庭学習支援を行うことで、学力の二極化に対応する。

3 「令和8年度 墨田区学習状況調査」における目標

(1) 目標

- ・これまでの成果を継承し、国語・数学・英語における基礎学力の定着と中上位層の維持・伸長を図るとともに、表現力や論理的思考力のさらなる育成を推進する。
- ・理科・社会においては、D・E層の縮小（45%未満）と基礎理解の定着を最優先課題と捉え、単元ごとの振り返りや学び直しを通じて、全体としての学力の底上げを図る。
- ・全教科においては、記述式問題への対応力と「思考・判断・表現」の育成を重点とし、特に無答率の低下を目標とする。